

# 肉眼解剖実習体（献体）の引取りから防腐処置の流れについて

系統解剖学分野 福永 まゆみ

## 献体とは

医科・歯科大学（学部を含む大学）にとって肉眼解剖実習は医学教育の基礎となる大切な授業科目と位置付けられており実習体の存在が不可欠である。しかし昭和 30 年～40 年代は医科・歯科のある大学は肉眼解剖実習を行うにあたって常に一定数の実習体を確保することが難しく非常に大きな問題となっていた。

九州大学でも同様の問題を抱えており医歯学の発展と向上のため昭和 46 年に篤志献体組織である「九州大学白菊会」が創設され会員のご厚意によって自ら「無条件・無報酬」で提供されたご遺体を使用して肉眼解剖実習が行われるようになった。その活動は現在も続いており会員数は 2248 名に及ぶ。

## 業務の流れ

献体が発生すると平日は総務係、時間外は業者との打ち合わせを行い、必要な項目が確認できた後、お迎えに上がる時間などの具体的な内容を決めていく。

大学に搬入すると全裸、仰臥位の体勢に整え全身の状態を所見用紙に記入する。

ここできちんと観察する事が実習に適したご遺体を選ぶ重要なポイントとなるため慎重に行う。医学部では大腿動脈注入法による防腐処置を行っている。大腿三角の皮下を走行している大腿動脈を剖出し血管内にカニューレを挿入、絹製の糸で結索し 10%ホルマリン水溶液とソルミックスの混合液を固定液として 2 日かけて 10ℓを体内に注入していく。

注入中も観察と記録を適宜行う。一見異常がなくても体内では予想以上に腐敗が進行しているご遺体や、強度な動脈硬化の影響で固定液が全身に浸透しづらいことがある。目視による観察は当然であるが触診による全身の固定進行の確認、体内、体外から発生する臭気なども記録しておく。注入が終了すると固定液を全身に定着させるため木枕に乗せた状態で 1 週間程時間を置く。

その後固定状態をより強固にするために常温のアルコール水溶液が入った液槽にご遺体を液浸し体内に注入されている 10%ホルマリン水溶液を 2～3 ヶ月かけて徐々にアルコールへと置換させていく。

置換終了後は専用の遺体保管用収納庫に収め実習に使用されるまで大切に保存される。これらの作業は地階のためカビが発生しやすい。防止策としてこまめな液交換や収納庫、それらが設置してある保管室は清潔に保つように心がけている。実習に使用が決定したご遺体は順次脳出しの作業を行い肉眼解剖学実習室に運ばれる。実習を終えたと、職員立会いのもと荼毘に付し遺族に返骨、もしくは大学に納骨となる。現在、大学搬入時から返骨・納骨まで 4～5 年の期間を要する。